

平成30年度「立正大学研究推進・地域連携センター支援費」研究成果報告書

1. 種目 第 2 種

2. 研究課題名 ナラティブ・アプローチにもとづく高齢者施設包括的実践プログラムの開発

3. 研究代表者

研究代表者名		所属部局名	職名
あだち	えいこ	社会福祉学部	教授
安達	映子		

4. 連携研究者

連携研究者名		所属部局名	職名
さとう	ひでゆき	(株)ハーフ・センチュリー・モア	サンシティ熊谷 施設管理者
佐藤	英行		

5. 研究実績の概要

当該年度に実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、申請書に記載した「研究目的」、「研究計画・方法」に照らし、600字～800字で、できるだけ分かりやすく記述して下さい。

<実施内容>
 支援・研修プログラムの総合的開発とナラティブ・パースペクティブの検証ならびに具体化という目的に即し、研究計画の通り、支援プログラムと研修プログラムのデザインを行い、実施した。具体的には、支援プログラムとして「人生の木」（ナラティブ・アプローチで活用される「語り」を促進し共有するためのツール）を使って、施設入居者の個別理解を深め尊厳保持を高めるプログラムを3回にわたる大学生との交流プロセスを含めて実施し、研修プログラムについては、4段階で構成されるナラティブ・トレーニングをデザインし、これを高齢者施設における多職種のメンバーからなるチームが継続受講した。
 その実践経過については、研究実践施設となったサンシティ熊谷が属する(株)ハーフ・センチュリー・モアの全国研究大会において中間的報告を実施した（2018年9月）。また、研修の実践をふまえ、これを「サポーターズ・ライティング・プロジェクト」という形で汎用性のある対人支援職の力量形成のための研修プログラムに取りまとめ、一般参加者向けの研修としてもその成果を還元した（2018年6月～10月立正大学品川キャンパスにおいて実施）。また、同様の取り組みを行うイタリアのホスピスでの研修にも参加した。
 研究発表としては、次項目の雑誌論文・学会シンポジウムに加えて、2019年5月25日に成果報告公開ワークショップを立正大学品川キャンパスにおいて実施することが決定している。

<意義と展開>
 本研究の意義は大きく2つに分けられる。その1つは、近年注目されているナラティブ・アプローチについて、これをサービス利用者等への支援と職員の研修の両方に位置づけ、組織全体として取り組むことにおける可能性や効果について一定の検証ができたことである。2つ目は、本研究での実践と成果を土台に、汎用性の高い対人支援職力量形成のための「サポーターズ・ライティング・プロジェクト」という具体的な研修プログラムが形になったことにより、今後これを広く対人支援職（ソーシャルワーカーや医療従事者等）のトレーニングとして活用・展開することが可能となった点である。
 この成果をふまえ、このプログラムを活用した研修への取り組みが、医療法人などの組織で2019年度よりすでに始まっている。

6. 研究発表（平成 30 年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（1）件 うち査読付論文 計（1）件

著者名	論文標題				
安達映子	サポーターズ・ライティング・プロジェクト—オートエスノグラフィーが拓く臨床空間				
雑誌名	査読の有無	巻	発行年	最初と最後の頁	
家族療法研究	有	36巻1号	2019	118-124	

著者名	論文標題				
雑誌名	査読の有無	巻	発行年	最初と最後の頁	

著者名	論文標題				
雑誌名	査読の有無	巻	発行年	最初と最後の頁	

〔学会発表〕 計（ 1 ）件 うち招待講演 計（ ）件

発表者名	発表標題		
安達映子・小森康永・国重浩一・矢原隆行	ナラティブ・セラピーの「今」を語ろう		
学会等名	発表年月日	発表場所	
日本家族療法学会	2019年6月29日	札幌市（北星学園大学）	

〔図書〕 計（ ）件

著者名	出版社		
書名	発行年	総ページ数	

研究補助を受けた方は、「研究成果報告書」を提出していただき、ホームページ等で研究成果を公開いたします。研究成果が公開できない事情がある場合には、その理由を記述して下さい。

※研究成果を公開できない理由

--